



Title	『ラ・アラウカーナ』に見るエルシーリャの思想
Author(s)	吉田, 秀太郎
Citation	Estudios Hispánicos. 1996, 20, p. 11-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93818
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『ラ・アラウカーナ』に見るエルシーリャの思想

吉 田 秀 太 郎

はじめに

15世紀末から16世紀にかけての、いわゆる新大陸の発見と征服は、文学史的な見地からすれば、数多の記録文学を生み出した。その中には冒険家たちの前人未踏の地への探検とその苦難を記したものや原住民との戦いの模様を事細かく述べた征服者たちの記録や、その征服と並んでキリスト教の布教に従事した聖職者たちの生々しい報告も含まれている。イスパノアメリカの文学はこのようにして、イスパニア人による記録の文学から始まり、やがて混血によって生まれた世代の文人たちに継承され、次第にその広がりや深みを増していくことになるわけであるが、このような初期の文学作品のうち、一際異彩を放つのがエルシーリャ (Alonso de Ercilla y Zúñiga 1533—1594) の『ラ・アラウカーナ』であることは周知のとおりである。言うまでもなく、この作品はチリのアラウコ族との戦いの模様を感動的にうたった壮大な叙事詩であり、カルロス五世の宮廷で培われた高い教養の持主の作品であるだけに、他の兵士たちの記録とは異なり、本格的な文学作品としてつとに高い評価を得ている。このたび、その邦訳を終えるに当たり、訳者あとがきでは余り詳しく触れ得なかった事柄の一つとして、この機会を借りて作者エルシーリャの思想の一端を作品を通して窺うことにした。

本論

1 運命論

『ラ・アラウカーナ』の棹尾を飾る十二連のソネットは、晩年を迎えた詩人が、自分の生涯の様々な出来事を回想した部分であり、エルシーリャの研究家として著名なメディーナも指摘するように、詩の形で表した告白

の言葉とすることができる。エルシーリャは37歌章に及ぶこの長い叙事詩を締めくくるに当たって、些か釈然としない心境を吐露しているのであるが、それは果して筆を措くための修辞なのか、それとも然るべき理由があったの事だったのか。釈然とせぬ気持ちの一つは、国王フェリーペ二世の彼に対する処遇にある。彼は国王の“disfavor”に痛く失望しているが、幼い頃より宮廷にあって国王がまだ皇太子の時の小姓として仕え、その後も国外に皇太子に随行し、またペルーで国王に反旗を翻したスペイン人の懲罰に向い、更には南のアラウコの地に征服に赴き、その生涯を文字どおり主君の為に捧げた者にとって、国王のその功績に対する報い方に不満を覚えるのは無理からぬところではあった。しかし、見方をかえれば、幼少の頃より彼に配慮し、イギリスをはじめ海外の諸国に彼を伴ったことは、当時皇太子であった国王の彼に対する好意の表れであったと考えられる。しかも、彼がフェリーペ二世の恩寵を失うに至るには、それなりの理由があった。すなわち王により命ぜられた使命を十分に果し得なかったことが挙げられる。彼は物事をきちんと行うことにかけて、いささか手拔かりがあったため、大事な交渉においても失策を犯すことがあったようである。けだし、宮廷生活にはこのような境遇上の浮き沈みは避け難く存在するもののようである。かつて、セルバンテスは『ガラテア』という牧人小説の中で、牧人の一人ラウンに次のように言わせている。すなわち羊を追う者は、宮廷生活の中で不注意やへまのためにこれまで王に尽くした忠誠心にも拘わらず王に疎んじられる人のような心痛を味わうことは無いというわけであるが、エルシーリャと面識のあったセルバンテスは彼を意識してこのように言わしめたものと考えられる。しかし、考えてみれば、王の恩寵を失えケースは、例えばインカ・ガルシラーソの場合にも見られるようにしばしばあることであった。

エルシーリャの憂鬱のもう一つの理由は、『ラ・アラウカーナ』の出版された前年、Don García Mendoza がペルーの副王に任命されたことにあった。この名誉ある地位が、事もあるうに、エルシーリャにとっては生涯忘れ得ぬ不快な出来事と深く係わる人物に与えられたことに、彼は耐えられなかったようである。この不快な出来事とは、チリ征服に彼が赴いた折りの司令官だった Mendoza にラ・インペリアル地で、ふとしたことからスペイン人同士で争ったかどで、死刑の宣告を受けたことである。彼は

辛くも一命をとりとめたが、この時のことはその後ずっと記憶から離れなかった。エルシーリャはこの詩の中で *mozo acelerado* という言葉で彼のことを酷評している。この叙事詩の中で、征服の指揮者が英雄として姿を現わさない理由もそこにあると言われている。このようなことから、エルシーリャの晩年は苦々しい思いの日々だったことが想像されるが、経済的な面での困窮は、彼がこの詩の中で述べて居ることとは事情が違うようである。これに関してはメディーナの研究が詳しい。

さて、『ラ・アラウカーナ』に見られる特徴的なこととして、もちろんこれは彼の思想の面においてであるが、作者が一種の運命論者であると考えられる。総じて、このような考えは、スペインの当時の支配的な思想でもあった運命の女神への信奉と軌を一にするものであり、かのケベードにおいてその最大の代表者を見ることができる。エルシーリャは、人の生涯の在り方を決定するのは自らの努力ではなく、万事運命の女神の気持ち次第であると考えた。熱心なカトリック教徒であった彼は、聖書に則り、犠牲の精神を心がけ、天上の神がその思し召しにより人に犠牲を求められたときは素直にそれに従おうとした。ところでいわゆる *Fortuna* に関して、彼はしばしば詩の中で言及し、運に恵まれれば通常考えられないような難事も実現することができ、また気力のない男も、運次第で立派な戦士となることができるという。そして、幸運に恵まれて高い地位に達するとき、人は有頂天になり、他の人達を遥か下方に見下ろすようになる。その時こそ、その人にとっての危険が始まり、その危険が最も大きくなる時だと指摘している。

Fortuna の気まぐれについては、今更言うまでもなく、諺としても古来知られている通りである。エルシーリャはその移り気について、第28歌章で次のように述べている。

Es Fortuna tan varia, es tan incierta
ya que se muestra alguna vez amiga,
que no ha llegado el bien a nuestra puerta,
cuando el mal dentro en casa nos fatiga,
y pues sabemos ya por cosa cierta
que nunca hay bien a quien un mal no siga,

roguemos que venga, y si viniese,
que sea pequeño el mal que le siguiese.

こうした運命の女神の気まぐれを信じたればこそ、今日のわれわれの目からも驚嘆に値する新大陸征服というあのとてつもない企てが遂行されたのではなからうか。運を天に任せて、徒に保身に汲々とししない気分があってこそ危険に身を投じることができたと言えるであろう。エルシーリャは更に運命の変わり易さに深く立ち入り、極めて穿った見方をしている。第2歌章にあるように、折角幸運により得たものも、一たび失われるや、後に残るのは悲しみと苦しみだけである。運命の女神が常に不変だと考えるのは、太陽がその光を放たなくなるほどにあり得ないことだ、運命の女神の輪は絶えず廻っているのだ、だから女神から最も安全な生き方は、むしろ一度も女神に出くわさない事だ、と述べている。

ここには、エルシーリャの哲学的な思想と共に、宗教的な思想も窺える。彼が、かつて得た良きものを失ったとき後に残されるのは悲しみと苦しみだけだと述べたときに感じたのは、とりもなおさず、死後の神の裁きであろう。彼の運命論は、カトリック教の思想と融合し、一体となっているのである。彼は結論として、人はその生涯を閉じるとき、最後の審判を受けねばならない。従ってその行為を正すべきであると考えた。そしてこのような思想を一步進めて、彼は人間の行為はすべて神の御心によりなされているという極端な考えを抱くに至った。彼の叙事詩にはその例が少なからず見受けられる。人が不幸な状態に陥るのは偶然とか、人が犯した失敗や不注意によるのではなく、むしろ宿命の神の怒りの結果だと考えるわけである。エルシーリャの前にこの地に足を踏み入れたペドロ・デ・バルディビアは、サンティアゴ市を建設した征服隊の隊長であったがアラウコ族に殺害された人であるが、エルシーリャは彼の墓地を見付けたとき、こう述べている。すなわち、先ず、数を頼むインディオたちも少数のスペイン人たちの知性と勇気と優位にはかなわなかったと称えた後、にも拘わらず

He aquí que el incontrastable y duro hado
dio un extraño principio a lo ordenado.

だったわけである。このことから分かるように、すべては人知の測り知れぬ偉大な力によって影響されると彼は考えた。こうして作中の人物の力によって為されたと思える行為もすべて神の御業と見なすエルシーリャの考えは、彼に続く叙事詩人たち、例えばペドロ・デ・オーニャなどにも影響を与えることになったが、今日の視点からは到底考えられぬことではある。第8歌章の第4連にあるつぎのような8行詩は、彼の思想を表明する良い例であろう。

Si no es disculpa y causa lo que digo,
se puede atribuir este suceso
a que fue del Señor justo castigo,
visto de su soberbia el gran exceso,
permitiendo que el bárbaro enemigo,
aquel que fue su súbdito y opreso,
los eche de su tierra y posesiones
y les ponga el honor en opiniones.

2 名誉心

長い伝統を誇る騎士道の精神が宮廷人であったエルシーリャに漲っていたことは、とりわけ16世紀のこの時代においては当然予想されることであるが、征服者として、そして詩人として、彼の生きた生涯は、実際その精神に貫かれたものであったし、彼の作品の中にもしばしばその精神が表明されている。スペイン人が勝ち誇るアラウコの兵たちの脅威に曝され、遂にコンセプシオンの町を放棄しようとしたとき、ドニャ・メンシーア・デ・ニドスは女でありながらも、とにかく見せがちな女々しい態度をとるどころか、兵士たちに名誉を傷つけるような事をしてはならぬと叱咤激励し、

Volved, que a los honrados vida honrada
les conviene, o la muerte acelerada.

と叫び、自ら刀と重い円盾を手にし敵の正面においては立とうとした態度

がそれである。またその少しまえ、ビジャグラがアンダリカンの坂での合戦に疲れ果てた同志を励ましたとき、たとえば頑張れ、この戦いに勝てばすべては成功するんだとか、どうか体を大切にしてくれといわずに、一途に、名誉はいまや危機に瀕している。だから諸君は一命を賭してもそれを守らねばならぬ。名誉を守るのは諸君一人一人にとって義務なのだ、と叫んだのも、その精神に外ならない。第8歌章の冒頭にある一連の詩は、こうした名誉が一度傷つけられた時の苦々しい気持ちをせつせつと述べたものである。

Un limpio honor del ánimo ofendido
jamás puede olvidar aquella afrenta,
trayendo al honor siempre así encogido,
quedello sin hablar da larga cuenta;
y en el mayor contento, desabrido
se le pone delante y representa
la dura y grave afrenta con un miedo
que todos le señalan con el dedo.

名誉を重んじる精神がひとりキリスト教徒にとってのみならず、粗野な筈のアラウコの人たちにとっても重要であったと考えた作者は第11歌章で、大勢の前で挑戦を受けたレンゴの発奮ぶりを子細に述べているが、これは注目に値する事柄である。エルシーリャにとって、そこには騎士としての誇りがあり、明らかに劣った人を相手にしての勝利の無意味さを誰よりもよく知っていたに違いない。従って彼の詩の世界では、無教養な土着の住民も立派な一人前の騎士になっているのである。レンゴはレウコトンとの競技の時、たまたま不覚をとり倒れるが、これによって一層闘争心を鼓舞され、敗者の不名誉を味わうのを恐れて力と技の限りをつくす。このように、名誉を重んじる人は一たび勝利を収めればそれに満足し、敗者に対して更に追い討ちをかけないのは当然である。エルシーリャはまさにそのような男であり、アラウコの人びととの戦いにおいても敗者に対しては常に同情的であった。その事は作品の中でよく見受けられるのであるが、中でもインディオの女性テグワルダが夫の遺体を探す場面に出くわし、彼自ら

その手伝いをし、やがて彼女を安全な場所まで連れていく件や、グラウラ
やカリオラーノに対する気高い行為、特にカリオラーノが衆寡敵せぬ戦闘
で傷ついた際、味方のスペイン人に対して言った(第28歌章)

..... “¡ Afuera,
caballeros, afuera, haceos a un lado!
que no es bien que el valiente mozo muera,
antes merece ser remunerado
y darle así la muerte ya sería
no esfuerzo ni valor, mas villanía

という言葉には、まさに彼の騎士としての面目躍如たるものがある。

同様の事がミジャラプエの戦いで捕えられたインディオたちの不運に同
情する第26歌章第8連での詩人の言葉にも言えるし、またそれに続いて12
人の土着の勇士が絞首刑に処せられるべく連行されるのを見て同情し、何
とか口実を設けて一人でも救い出してやろうとする同歌章の第23連の詩も
感動的である。両手を見せしめのために斬り落とされたアラウコ族のガル
バリーノの勇ましさに打たれた詩人は、野蛮なのは土着の人かスペイン人
か分からなくなり、勝利を収めた筈の友軍の事を

“¡Oh gentes fementidas, detestables,
indignas de la gloria deste día!

と形容している。このような例を挙げていけば限りがないが、敢えて特に
目立つものを更に2, 3紹介すれば、第31歌章の、カニエーテの要塞をカ
ウポリカンに率いられたインディオたちが攻撃するに至るまでのスペイ人
人による裏切り行為について述べるときのエルシーリャの複雑な気持ち
(第49連)を先ず挙げることができる。次に、その出来事のあった後、詩
人は数人の兵と共に索敵行を行う途中、ラウカと言う名の若い土着の女性
が傷を負い、森の茂みに身を潜めているのを発見する。彼はその女性に何
故このような所にいるのか、何故傷ついているのかなど詳しく聴き、彼女
の語る悲しい身の上話を聞き、すばやく彼女を慰めて自殺を思い止まらせ、

自らの手で傷の手当を施し、スペイン語のできるインディオに命じて彼女を安全な場所に移させる(第32歌章第30～42連)。

3 カウポリカンへの想い

『ラ・アラウカーナ』を読んで誰しも気づくことといえば、先ず、この作品に登場する主要な人物のうち、イスパニア人よりもむしろ被征服者側の武将たちの名が圧倒的に多いことであろう。因みに、征服者側の隊長ウルタード・デ・メンドーサの名は、アラウコ族の総大将カウポリカンの名と比べて、四分の一の頻度である。たしかに、彼以前の征服者の隊長、ペドロ・デ・バルディビアは、カウポリカン程ではないにしても、かなりしばしば登場するが、それは称賛さるべき英雄としてではなく、むしろ欲深くて思慮の浅い非難さるべき人間像として描かれている。一方、カウポリカンは、ラウタロウやレンゴやトカペルなどと並んで数多くの戦いの場面に現れるが、その人間性について最も高い評価を受けている点で注目に値する。第2歌章において、土着の主要な人たちがイスパニア軍に対抗するための軍を組織し、その総大将を決める場面があるが、その際も、いろいろな酋長の名前が挙げられるが結局最後にその地位につくことになる彼は、その名前は述べられるものの、なかなか登場しない。

Caupolicán el fuerte no venía
que toda Pilmayquén le obedecía.

おなじ歌章の第46連には、彼の人物像がかなり詳細に述べられているが、その言葉のすべてに、彼の偉大さが窺われる。すなわち、非常に勇気のある気高い若者であり、威厳があり、荘重で厳格で、あらゆる権利を保持、擁護する人であり、正義感が強く、体格も堂々としていて、器用で敏捷で、賢明であり、決断力があり、物事に動じない性格、とあるから、これほど高い評価はあり得ないほどである。第2歌章におけるこうした紹介は次の歌章にも引き継がれ、いまだかつて異国民に屈従したことのないアラウコ族の名誉が初めてイスパニア人によって傷つけられた事にたいする彼の発奮ぶりをのべる段では、まさに名誉を重んじる騎士として、イスパニア人に勝るとも劣らぬ人物として描かれている。先に述べたバルディビアもカ

ウポリカンに命乞いをする場面があるが、その時彼はその懇願に応じようとした。もっとも、彼の親類の者の手にかかって目的は達せられなかったのであるが(第68連)。彼は土着民の総大将として常に合戦に勝利を収める。第91連では、14人の騎馬兵が侵入したので助けて欲しいと馳せ着けた味方の使者たちに対し、そんな少数の敵なら、所詮逃げおおせない筈だからと言って、

Caupolicán, con muestra no alterada
hizo que del temor se asegurase.

味方を安心させる。このようにして、自信に溢れる彼は、第8歌章にも見られるように、合戦の勝利の礼を部下たちに述べる、人間味豊かな人物として描かれている。ラウタロウを迎える彼の姿は次のように述べられている。

Caupolicán alegre, humano y grave
los recibe, abrazando al buen Lautaro.

カウポリカンの勇壮な姿は、エルシーリャの目には、ヨーロッパの同じ教養を身につけた人たちのそれと全く変わらない。しかし部下を迎えて親しく抱擁する習慣が果して土着の人たち、とりわけ当時の人たちにあったかどうか。彼はイスパニア人を自分たちの地から駆逐するに止まらず、更にイスパニアの地まで反攻を加え、国王カルロス五世までも従えんとする意気込みを示す一方、冷静沈着な男でもある。作戦会議では、例えば第8歌章第31連に見られるように、酋長ペテゲレンの過激な発言を分別ある言葉で制し、他の酋長たちにも発言を求めるなど、非常に民主的なところも見せている。このように優れた資質を有するカウポリカンなればこそ、エルシーリャにとって、またイスパニア軍にとって、敵として扱うにふさわしい人物であったわけである。さもなくば、いかに手柄を立てたところで、弱者と知りつつ戦ったことから、何ら誇りにはなり得なかったはずである。逆に言えば、エルシーリャは、このアラウコ族の征服を正当化するためには、彼らを自分たちと対等の者と見立てる必要があったとも考えられるの

である。それに加えてもう一つ、キリスト教徒たるエルシーリャにとって、その教えに従わせることは偉大な使命であった筈である。従って、第9歌章の第6連にもあるように、ラ・インペリアルインペリアルの町に突入すべく軍備を整えていたカウポリカンがまだ無事でおられたのは、神の慈悲心 (*clemencia*) に他ならなかった。神はその懲らしめを、*clemencia* によって引き延ばしているに過ぎないのだと彼は考えた。

『ラ・アラウカーナ』の魅力の一つは、戦闘の合間に挿入される土着の人たちの風習の紹介でもあるのだが、例えば戦勝記念に催される兵士たちの競技などに関しては、やはりどこことなく中世の騎士物語に現れるものや、更に遥かローマの時代に遡るヨーロッパの世界を彷彿とさせるものがある。第10歌章では、その審判として指名されたカウポリカンの行動が、競技者のそれよりもクローズアップされる。試合に加わったオロンページョとレウコトンの激しい興奮ぶりを抑えるカウポリカンは

mostrándose imparcial, discretamente
la furia de Orompello aplaca presto
con sabrosas palabras blandamente

と極めて温和な人物らしく描かれている。しかし結局、このようなとりなしでは間に合わず、彼自ら競技場において両者を分けることになるのであるが、彼の威光を窺わせる一場面ではある。

カウポリカンの勇姿は第16歌章にも現れる。コンセプションにイスパニア軍が海路入港したという知らせに、彼は酋長たちを例によって召集し、作戦会議を開き、アラウコの人々を不滅の者とすべき日の到来したことを告げ、一日にして敵を撃滅するという堅い意志を述べる件がある。その件は長々と5連に及んでいる。また第25歌章では、カウポリカンはスペイン軍に使者を派遣し、彼が隊長と一騎打ちをしたい旨、申し出る箇所がある。ここでは *el gran Caupolicán* という言葉が2度も用いられている。結局激戦となり、スペイン軍はカウポリカンの *valor* の前に退却を余儀なくされる。こうして常勝を誇る彼も、ついに幸運に見放される時がやってくる。3か月の間に4つもの合戦に敗れるカウポリカンは、第29歌章において、それでもくじけぬ彼の本領を発揮している。彼は部下の者たちに向かって

次のように言っている。

Las casas, ropas y mueble infrutuoso
que al descanso nos llaman, abracemos,
que habiendo de morir, todo nos sobra
y todo con vencer después se cobra.

...que no es bien que haya asiento en la hacienda...
cuando el honor aun su lugar no tiene
ni es razón que soldado alguno atiende
a más de aquello que a vencer conviene...

かってセルバンテスが若かりし頃、レパントの海戦で、マラリヤにかかり、黄色い顔をしながらも、上官の命にも拘らず甲板を降りなかったあの姿を人は思い浮かべる事だろう。あの武人の心意気が野蛮である筈のアラウコ族の武将にも欠けてはいなかった。エルシーリャのカウポリカンに対する思い入れが見事に詩行となって表されたわけである。

第3部の第30歌章から33歌章にかけては、専らカウポリカンのために紙面が費やされている観がある。彼の生涯を通じて最も痛ましい事件が起こるのもこの箇所においてである。敵情を密かに視察させるべく放った間諜プランがアンドレシーリョという名の、敵側の同胞に気を許して、反って自軍の内情を敵側に告げ、アンドレシーリョの奸計に乗せられたカウポリカンの軍は、見せかけの油断の敵を襲って大敗を喫し、退却する。この様子を描くエルシーリャの筆致は簡素であり、淡々としている。

Quedó Caupolicán desta jornada
roto, deshecho y falto de esperanza,
que fue mucha la sangre derramada
y poca de su parte la venganza;
(第32歌章第24連)

すでにカウポリカンの運勢は傾き、エルシーリャの言う神の慈悲心も薄

らいだかに見える。インディオの一人が物欲に目がくらみ、敵の甘言に騙されてカウポリカンの居場所を知らせてしまう件が第33歌章にある。そのインディオは裏切り行為を自覚し、さすがにカウポリカンの怒りを恐れて、敵の兵士をある地点より先へは案内できない。だが結局は不意をつかれたカウポリカンは敵軍の捕えるところとなり、連れ去られることになるわけであるが、ここでも彼は、このような不運な事態に追いやられても、冷静さを失わない。本人を確認するために質問が発せられるが、彼は身分を否定し、部下の者たちも同情して彼がカウポリカンであることを認めようとしない。日頃の彼に対する尊敬の念の表明と考えられる。彼ほどの人も不運には勝てず、一人の不心得な男の裏切りを如何ともできなかったわけである。だが、エルシーリャの態度はむしろ、彼に対して同情的である。

ところで、この時に見せた彼の妻、フレシアの態度はこの土着の人たちの心意気を示すものとして象徴的である。敵の急襲を見て、素早く崖から跳び降りて逃げようとする彼女は捕えられ、カウポリカンの妻であることが分かるや、夫と同じく、イスパニア軍の前に連行されるのであるが、彼女はそこにいる夫の姿を見て慨嘆し、次のように言うのである。

Y agora miserable y desdichada,
todo en su punto me ha salido vano
viéndote prisionero en un desierto
pudiendo haber honradamente muerto.

生きて虜囚の辱めを受けるくらいなら死んだ方がましだという一種の名誉心、武士としての誇りが女性にもあることに驚かされる。いわゆるスパルタ的教育がこの野蛮とされている人びとにもなされていたことは大いに注目すべき事柄であろう。同じ歌章の第80連には、尚武の精神が、いや、面目の意識がフレシアの言葉として要約されている。

¿No sabes que una breve muerte honrada
hace inmortal la vida y gloria?

さて、イスパニア人に唆された裏切り行為によりカウポリカンは無残な

処刑を受けたのち、キリスト教徒となって死ぬのであるが、これはいかにも皮肉である。これではどちらが文明人でどちらが野蛮人か分かったものではない。あまりの残忍な仕打ちに、当のエルシーリャも、もしこの場に居合わせたら刑を引き延ばしたであろうと述懐している。

以上見たようにアラウコ人は死に至るまで好意的に且つ優れた人物として描かれている。エルシーリャはこのような立派な相手と戦ったことに満足しているかのようである。何故なら明らかに自分より劣る相手と戦って勝ったのでは騎士としてのプライドが許さなかった筈だからである。加えて相手がいわゆる *infiel* であり、主君に従わない者であることは彼らにとって戦いのための大義となり、このことによって彼らの行為は正当化されたのである。

カウポリカンがキリスト教徒に改宗して死んだことは、この征服という一大事業にとって象徴的な意味を持っている。彼自身この時代に生きた人物として、セルバンテスの小説の中の騎士のように当時支配的だった騎士道物語の精神を具現化する英雄として自負していたのではなかろうか。国土回復運動によって回教徒たちをイスパニアから追い出し、その勢いにのって更に異国の服わぬ者たちを従え、国王に忠実なそしてキリスト教に帰依する民とせんとする15世紀のスペイン人の最も典型的なケースであったように思える。

なお、本稿のスペイン語のテキストとしては Alonso de Ercilla: LA ARAUCANA, I, II. Edición de Marcos A. Morínigo e Isaías Lerner, Clásicos Castalia, Madrid. 1987 を用いた。